The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	カトマンドゥの風と音 ： 中期ベンガル語の初期作品『クリシュナ讃歌』の写本断片の発見
Author(s)	北田, 信
Citation	印度民俗研究. 2013, 12, p. 74-88
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/50058
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

カトマンドゥの風と音

中期ベンガル語の初期作品『クリシュナ讃歌』の写本断片の発見

北　田　　信

昔の日本の占いに、なにか悩みごとがあれば、四辻を行きかう雑踏の中に立ち、周囲の音に耳を傾ける、というのがあるそうな。じっと聞き耳を立てていると、雑多な物音や群衆の話し声の中から、自分の心中の問いに対する答えやヒントが、どこからともなく聞こえてくるのだという。

私の研究・調査のやり方（“手法”と言えるほどのものではないが）は、これに倣うところがある。現地に行き、その土地の音響に耳を傾けるのだ。都市の喧騒、迷路のように入り組む細い路地を通り過ぎてゆく風、人々のおしゃべり、店舗から洩れる歌謡曲、等々に耳を凝らす。そうすると、次第にその都市独特の特徴を持った音響が、聞こえてくる。しばしば、都市の音響は特有の構造をなし、複数の層をなしているのが体感される。たとえば、ネパールの首都カトマンドゥ市[1]の音響は二重構造をなしている。この街では表向きの会話は公用語のネパール語（インド・アーリア語）で行われるが、内輪の親密な会話になると、先住民の言語であるネワール語（チベット・ビルマ語系）に切り替わる[2]。カトマンドゥ市のネワール独特の 4・5 階建ての高層住宅の立ち並ぶ峡谷の谷間のような細く薄暗い街路で聞き耳を立てていると、インド・アーリア語（ネパール語）の会話の響きの奥深い底に沈殿する澱のように、まったく異質な音響、つまり、ネワール語の響きが聞こえてくるようになる。それは山の方からカトマンドゥ盆地に吹き下ろす風のように、ある時は女性的でやさしく伸びやかな、またある時はまるでなにか獣の鳴き声[3]のように荒々しい、不思議な響きがする。

世の中に満ちる気分のようなもの、たとえば春先の街路にかすかに

---

[1] カトマンドゥという語は二つの異なる意味で使われ紛らわしい。一つは、ネパールの首都カトマンドゥ市、他方は、カトマンドゥ盆地という意味である。カトマンドゥ盆地は、首都カトマンドゥ市やその周辺の都市、村落を含む、山梨盆地程度の規模の肥沃な盆地である。拙稿ではこの二つを、それぞれカトマンドゥ市、カトマンドゥ盆地、と呼び分けることにする。

[2] ただし、今日では、ネワール系はもはやカトマンドゥ盆地に暮らす人口の大多数を占めず、非ネワール系の人々の会話は、ネパール語でなされるか、あるいはそれぞれの言語、ミティラー語やチベット語その他の言語で行われる。

[3] 言うまでもないことだが、これは当時の、私のごく感覚的な初印象である。実際には後述する通り、ネワール語には古典文学があり、サンスクリット古典文学の影響を強く受けながら、言語表現の洗練が極められた。

漂う花の香や、感情を表現することが必ずしも得意ではない人の表情にほころびる微笑み、のような、微妙な要素に、私はおおいに興味を抱き、そういった気配のようなものを五感を澄ませて捉えようと努めている。研究成果としても、微かなるもの、か細い声、のようなものについて報告できたらいいと思うのだが、これらの香りのエッセンスのように精妙なるものは、言葉による表現を越えてしまう。だから、言葉を用いた報告としては、ごく外面的な事象をなるたけ正確かつ即物的な表現を用いて文献学的に記述することに終始しつつ今日に至っている。もし仮にもっと精妙なものをつかもうとすれば、それは音楽とか絵画になってしまうだろう。

ネワール人の都市文化が栄えたカトマンドゥ盆地には、大量の写本が良好に保存され、インド古典文献研究における重要な写本の多くがこの地で発見されてきたということは良く知られている。ネパール国立古文書館は、アクセスの容易さから、外国の研究者によっても頻繁に利用されているが、その他にも、個人が所有する写本が膨大に、しかも手つかずのまま眠っている。つまりパンディットの家系が代々受け継いだ写本が、個人宅の書庫に保存されている。

これらの写本のうち、サンスクリット語やチベット語で書かれたものについては、これまでも盛んに研究がなされてきたし、現在も研究が進んでいる。ネパール国立古文書館に所蔵される写本のマイクロフィルム（およびその電子データ）は、ドイツの協力で運営されているネパール・リサーチ・センターを通して簡単な手続きをすれば迅速に手に入るから、“写本集めは体力仕事”と言われる南アジア地域においては例外的に仕事が楽な場所だといえるだろう。

カトマンドゥ盆地は京都盆地をひとまわり大きくした程度、山梨盆地程度の広さを持ち、ネパールの首都なのにもかかわらず市街地はこぢんまりとしていて、それなりに近代的な設備が整っているから、非常に滞在しやすい。外国人が宿泊する地区（タメル）は繁華街としての機能も果たしており、日本食やイタリア料理のレストランがひしめき、夜になると若者がたむろい、方々のカフェやバーでバンドの生演奏をやっていたりして、都会のナイト・ライフを楽しめる。滞在中、リサーチ・センターで注文した写本のマイクロフィルムが出来上がるのを待ちながら、昼間はカトマンドゥ盆地に散らばる歴史的遺物を訪ね、夜は、この国なりの“現代”を観察する。町並みにはネワール様式の住居が多く残り、びっしりと細密な装飾彫刻が施された飾り窓の“アパルトマン”が、若者のたむろう飲み屋やクラブになったりしている。

この土地では飲酒はタブーではなく、ほろ酔い加減で、テクノやアンビエントなどの音楽に合わせて、身体を、まるでヒンドゥー教寺院の彫像のようなポーズでくねらせながら踊っている。数世紀前のマッラ王朝時代の人々が興に乗って踊り騒ぐさまも、これとそれほどかけ離れてはいなかったのではないか。音楽の様式が変わり、設備が近代化されてしまっても、言語化されず文字にも書かれない身体的な領域においては、古くからのものが無意識のうちに存続しているのだろう。

こうした“酩酊”とか、酔っ払いながら歌ったメロディーや踊りは、たいがいその場限りの出来事で、それをわざわざ記録を採ったりすることはまずない。また、哲学や宗教のように意義深く“為になる”教訓を含むわけでもないこの手の些細な事柄が、文献学において真面目に取り扱われることはほとんどない。

ところが、ごくまれにではあるが、文献の中に、この手の“不真面目”な事柄の記録が残されていることがある。昔、人々が酔っ払って歌い踊ったその痕跡が、文献に見つかることがあるのだ。

新期インド・アーリア語の写本群

上に、カトマンドゥ盆地にはサンスクリット語の写本が多く保存されている、と述べたが、実は、保存されているのはサンスクリットの文献にとどまらない。インド・アーリア諸語の言語史の段階としてはサンスクリット（古期インド・アーリア語）の次に来る中期インド・アーリア諸語（プラークリット語、アパブランシャ語）の文献も存在するし、さらに、それ以降の段階である新期インド・アーリア諸語、すなわち現代のインド亜大陸で話される諸言語の古い文献も多く残されているらしいことが分かってきた。つまりインド亜大陸の約三千年にわたる非常に長い言語発展・言語分化の過程の様々な段階を示す資料が、その都度、辺境のカトマンドゥ盆地に流れ着き、保存された、ということである。

コンピュータにたとえるなら、ある一つの文書を何回も書き変えて更新していく際に、その都度バックアップをとって外付けのハードディスクに保存しておいたのと様子が似ている。インド本土では言語の状態はどんどん変化を重ねて更新されていき、昔の状態は記録されずに消滅していくが、そのバックアップに相当するものが周縁部のネパールに写本として残っており、たび重なる更新の作業工程を如実に知ることができる。

また、新期インド・アーリア語の文献を、ヨーロッパのロマンス諸語の歴史的な発展に比較して解説してみるならば、次のように言えるだろう。ロマンス諸語の場合、その起源は共通して古典語であるラテン語に遡る。ラテン語が地域ごとの変化を蒙って、現代の仏・伊・西さらにルーマニア語やスイスのレト・ロマン語など様々な言語に分化していくが、その途上の言語諸段階、たとえば古フランス語や古プロヴァンス語などの資料が残されているのに比することができる。これらの資料は、トゥルヴァドゥール（トゥルヴェール）とかヨクラトール[4]などと呼ばれる遍歴詩人や大道芸人が、パトロン（貴族）の宮廷での娯楽として披露した恋愛詩や、路端でアクロバティックな芸当を見世ながら歌った滑稽な歌詞などが中心となっている。面白いことにインドでも状況は良く似ており、アパブランシャ語から派生した古ベンガル語、古ヒンディー語などの資料の多くは、おそらく大道芸人や遍歴詩人たちが演奏したと思われるような歌謡である。

ただ、中世ヨーロッパの歌謡とインドが異なるのは、これらの新期インド・アーリア語の歌謡が、純粋に世俗的な内容をうたったものではなく、歌が作られた当時の宗教実践を反映していたり、あるいは、その頃巷にはやっていた神秘主義的な色合いを濃厚に帯びている、という点にある。

カトマンドゥ盆地で発見された新期インド・アーリア語の資料の中で、最も注目すべきものは、やはり、20 世紀初頭にネパール・チベットを冒険したインド人の文献学者ラーフル･サーンクリテャーヤンが、カトマンドゥの仏教僧院で見つけた『チャルャーパダ』であろう。これはアパブランシャ語から新期インド・アーリア語東部諸語へ変化する移行期の言語段階にある 47 個の歌詞を集めたものであり､新期インド・アーリア語による現存資料の中では抜群に古いものである。これは、9 世紀から 12 世紀頃、インド東部（今日のベンガル、アッサム、オリッサ、ビハール）の地域を行脚したタントラ系の放浪修行者たちが歌っていた歌詞を記録したものだと考えられる。この地域には現在でもバウルなど、放浪修行者の伝統が残っており、『チャルャーパダ』の歌詞と良く似た歌を演奏している。

これらのタントラ系の放浪修行者たちの宗教実践においては、飲酒・肉食などの社会的な禁忌を犯すことが、意図的に行われた。夜、人里離れた墓場や、密林の奥の朽ち果てた僧院にぼさぼさの髪の毛を

[4] Joculator. Juggler, Jonglieur.

した修行者たちが集い、飲酒・肉食などの狂宴を繰り広げた、というようなことも、『チャルャーパダ』の歌詞から読み取れる。このような神がかった者どもの“いかがわしい”乱痴気騒ぎが、時代が下ると、毒気が抜かれて儀式化され、式次第がお行儀よく整えられて、仏教儀礼の中に組み込まれ、今でもネワール仏教の僧院で定期的に執り行われている。

ネパールやチベットのタントラ仏教の曼荼羅で、良く見ると、エロティックに絡み合いもつれ合う神・神妃たちが飲酒や肉食をしている図があるが、この秘密の儀式の様子を描いたものといわれる。もっとも今日の実践者たちは、それを象徴的に執り行う、つまり歌や舞踊に置き換えてソフトに表現するのである。

秘密の儀式では、『チャチャー』と呼ばれる、『チャルャーパダ』と同系統の歌詞が歌われ、それに合わせて踊り手が神や神妃に扮装して踊るのである[5]。その際、歌のメロディーはインド古典音楽のラーガ（旋法）・ターラ（拍子）に基づいており、舞踊の方はインド古典舞踊のアビナヤ（身振り）に基づいている。つまりこの儀式において演じられるパフォーマンスは、本質的にはインドの世俗的な歌舞音曲と異ならず、今日のインドで実践される古典音楽や古典舞踊と同じものを行っている。ただしここで行われているのは、古風な形式、少なくとも 17 世紀以前の演奏形式を固定化した状態で忠実に伝承しているのだ。

酒を飲んで酩酊した状態で歌い踊るということが、宗教儀礼になってしまった結果、その際の歌詞が文献として残ったという、奇妙な事例である。タントラ仏教において、どうしてこういうことが起こったのか、という問題の考察は、仏教学の専門家にまかせることにして、一つだけ現地に行って気付いたことを述べておこう。それは、ネワール人の文化では飲酒・肉食がタブーではないということである。アルコールの類は白昼堂々と酒屋で売られているし、家庭では強烈な米の蒸留酒ロクシとかサワーミルクの発酵ビールなどを、男性だけでなく女性も一緒に楽しむ。ネワール料理ではバッファローの肉をさまざまな方法で調理し、干し肉、一種のジャーキー、さらに、ほとんど生食のマリネ状のもの、内臓、脳みそ、皮のところの分厚い脂質まで、余すところなくいただく。ひとくちにタントラの実践といっても、さま

[5] ネワール仏教徒が口伝するチャチャー歌については次の拙論を参照されたい。Makoto Kitada, “Cacā songs: The oral tradition in Kathmandu”. In: Indian and Persian Prosody and Recitation, edited by Hiroko Nagasaki, Saujanya Publications, Delhi 2012, pp.193-227.

ざまなものがあるから、一概には言えないが、少なくとも儀礼としての飲酒・肉食に関しては、ネワール人にとってはそもそもタブーではなかったのだから、さしたる抵抗なく受容しやすかったはずだ。

私のインフォーマントである『チャチャー』歌を伝承するネワール人の僧侶によれば、金剛乗仏教の神髄は秘密儀礼のなかにあり、さらに『チャチャー』歌の歌詞の中に、その神髄が凝縮されているのだ、という。ネワール文化はタントラや金剛乗仏教と不可分に結びついていたから、このことはつまり、ネワール文化の核になるものは秘密儀礼にあり、また、チャチャー歌のなかに込められている、ということになる。少なくとも私の師匠の話に耳を傾ける限りでは、そのように考えているらしいことが理解された。ネワール人はチベット・ビルマ語系に属するにもかかわらず、自分たちの文化の拠り所あるいは核心を、新期インド・アーリア語の歌謡にもとめている、という複雑な話になる。

農民たちの歌

上記のチャチャー歌は、ネワール仏教の最高階級であるバジュラーチャールヤたちが伝承してきたものである。これに対し、農民たちの間で伝承されるダファーと呼ばれる歌謡がある。これは、朝夕、仏教・ヒンドゥー教の寺院に近隣の農民たちが集まって、太鼓と小型シンバルで拍子をとりながら歌う御詠歌である。カトマンドゥ盆地に点在するネワール人の住む都市では、夕暮れが訪れるとあちこちの寺院にランプの灯がともされ、町に御詠歌の歌声がこだまする。

ダファーは様式的にはチャチャーからさほどかけ離れてはおらず、ラーガ・ターラの古い形式に則って作られている。先導を務める長老が前奏に当たるアーラープつまり無拍子の独奏を歌い、それが終わると皆が太鼓・シンバルの伴奏を伴って歌詞を斉唱するのである[6]。ダファーについては東京芸術大学のサワン・ジョシさんが現地調査を進められているので、その成果に期待したい。

ダファーの歌詞もまた、ネワール人のマッラ朝が栄えた時代に作られた古いものが伝承されているようであるが、ネワール語の歌詞に交じって、多くのものはミティラー語（マイティリー）で書かれている[7]。

---

[6] この演奏次第も、チャチャー歌に共通する。

[7] ここで「書かれている」としたのは、つまり、歌詞は暗記されるだけで

雅語としての新期インド・アーリア語

以上で見てきたことをまとめると、ネワール仏教の最高階級はアパブランシャや新期インド・アーリア語の古い言語の歌詞（チャチャー歌）を伝承し、下層の階級は母語ネワール語か、あるいは新期インド・アーリア語の新しい段階に属するミティラー語の歌詞（ダファー）を伝承している。僧侶階級でも、バジュラーチャールヤに次ぐ二等級に属するシャーキャ階級が歌う仏教讃歌[8]は、サンスクリット語で書かれたものである、ということは興味深い。つまり、ここではサンスクリットは必ずしも最高の価値を与えられてはおらず、金剛乗仏教で崇め尊ばれる伝説の放浪修行者たちが教えを説いたとされるアパブランシャ語や新期インド・アーリア語の古形の方が、高く位置づけられているのである。古代インドのサンスクリット文法書においてアパブランシャは“堕落した言語”という位置づけにあったから、ここに見られる等級づけは独特である。

このように、カトマンドゥ盆地において新期インド・アーリア語に比較的高い位置が与えられていたことと関係するのかどうか、確かなことは言えないが、カトマンドゥにネワール人自身のマッラ王朝がうち立てられ、ネワール文化の独立性が強調された時代に、王たちの庇護のもとで、インド東部で使われる二つの言語、ベンガル語とミティラー語を用いて、歌や戯曲が盛んに創作されたことが知られている[9]。カトマンドゥ盆地に栄えた三つの主要都市カトマンドゥ、パタン、バクタプルの宮廷を中心に、まずはベンガル語・ミティラー語による芸能が隆盛し、次にネワール語でこれを倣う形で、古典ネワール語の初期の抒情文学が生み出され、ネワール語による最初の演劇が著された。

この時代の芸能文化の名残は、今日でもカトマンドゥ盆地の各地に残っており、祭日になると、都市の王宮広場（ダルバール）などで仮

なく、ノート冊子に書きとめられており、適宜それを参照しながら歌われるからである。

[8] 仏教讃歌 (stotra) は、サーキャ階級に専用の歌謡、ということではなく、最高階級にも、また、農民にも、わけ隔てなく歌われる。

[9] Horst Brinkhaus, “On the tradition from Bengali to Maithili in the Nepalese dramas of the 16th and 17th centuries.” In: Maithili Studies. Papers presented at the Stockholm Conference on Maithili language and Literature. Department of Indology, University of Stockholm, 2003, pp. 67-77.

面舞踊や演劇などが演じられるのが見られる。このような伝統的に演じられる演目の中に、ひょっとするとマッラ王朝時代に作られた作品が痕跡的に残っているかもしれないが、今のところ確証はない[10]。

古典ネワール語文学へのいざない

このようにネワール人の文化はインドの文化とはかなり異なる独特な魅力を持っているということを、現地を訪れて強く感じた。現地に行かなければ、ネパールやカトマンドゥ盆地などインド亜大陸の周縁にある小国に過ぎず、そこに良好に保存されるインドの古い資料さえ入手できて自分の研究が進めばそれで事足りる、と思っていたのである。ところが実際に“周縁の小国”を訪れてみると、そこにはインドには存在しない独自の別世界が広がっている。インドでは何百年も昔に消滅してしまった文化要素が今なお息づいており、しかも独自の発展を遂げている[11]。タイムマシンに乗って何百年も前のインドを目の当たりにしているようでもあり、あるいは、もし歴史の流れが違う方向に進んでいたらインドがそうありえたかもしれない可能性としてのインド、パラレルワールドに入り込んだようでもある。ネパール文化の或る部分は、インドと共通しながらも、それをより繊細に洗練させた気配さえ漂わせ、いくら見ても飽きることがない。

この地に保存された新期インド・アーリア語の古い歌謡の謎を解明するには、逆説的だが、ネワール文化を理解することが必要だろう、そして、ネワール人の文化は、ネワール人と共に飲み食いし共に時を過ごしてみなければ分からないだろう。そしてその精髄は、彼らが何世代にもわたって用いてきた言語表現や、文芸に漲っているだろう。

初めて訪れたカトマンドゥから帰国してしばらくして気がつくと、ネワール語の入門書や初級の読み物を読み漁っている自分に気がついた。カトマンドゥ盆地にはそれ以後もチャチャー歌の調査で何回も訪れる成り行きになったので、訪れた際には毎回カトマンドゥ旧市街の市場（アサン・チョウク）の片隅にある小さなネワール語書籍専門店

---

[10] たとえば、パタン市の王宮前広場で毎年催されるカールティク・ナータク（カールティク月の舞踊）には、パタン市が王国であった頃の芸能が伝承されていると考えられる。

[11] たとえばチャチャー歌の中には、金剛乗仏教の内容を述べつつもバクティ詩に酷似する歌詞、なども存在する。

『サフー・ドゥクー』に通って、ネワール語の本を買いあさった。挙句の果てにリサーチ・センターの古典ネワール文学研究の大家カーシーナート・タモート氏を訪ね、古典ネワール語の写本を講読していただくことにした。

カトマンドゥ盆地の煌びやかな建造物や、すぐれた彫刻群を見ても明らかな通り、ネワール人は非常に洗練された知性の持ち主である。その洗練は、たとえばネワール人が誇る多彩な料理文化にも見て取れるが、古典ネワール語で書かれた文献群にも余すところなく発揮されている。サンスクリット文献の忠実な翻訳・注釈から始まって、流麗な美文学、物語文学、さらに医学・薬草学・天文学についても膨大な写本が、未だにほとんど研究されず残されている。またカトマンドゥ盆地の絢爛たる建築技術の裏付けとなるような建築学の書物や仏像の鋳造技術を図解した冊子などもある。

抒情詩や物語の写本はネワール絵画様式の美しい挿絵で飾られている。ネワール絵画はインドの古い宗教画に起源を持ち、これにチベット絵画や近世のインド細密画の様式を混ぜ合わせて生まれたスタイルである。一見すると意匠はチベットの仏画などに良く似ているが、色彩は派手で、背景となる動植物は亜熱帯のそれであり、登場人物はより肉感的な印象を与える。枠縁を飾る花模様にはムガルの装飾様式が用いられていることもあり、マッラ朝の頃のネワール人の旺盛な交易範囲を如実に反映している。毎年 8 月頃、雨期になると、虫干しの目的を兼ねて、僧院に保存されている絵巻物が公開される祭りがある。

カトマンドゥ盆地を訪れると、私は連日タモート先生を訪ね、今まで研究されていない写本を選んで講読していただくのである。古典ネワール語の写本のほかに、上述のとおり戯曲にはミティラー語やベンガル語で書かれているものも多いから、それらもときおり混ぜつつ、様々なジャンルのものを読んだ。タモート先生は、まず原文を独特の節回しで歌うように音読してから、ネパール語に解説していく。ドイツ語の髭文字を彷彿とさせるネワール文字で書かれた古い写本が、インド・アーリア語のリズムとは明らかに違う、チベット・ビルマ語系統特有のリズム感[12]で朗々と謡われるを聞いていると、マッラ朝時代にタイムスリップして朗誦を聞いているかのような錯覚にとらわれる。

---

[12] 感覚的な表現になってしまったが、つまり、短音節の語彙が多いことによって出るリズム感なのだろう。ただ、ネワール語には高低アクセントはない。

至福の時である。

古典ネワール語の抒情文学はサンスクリットの抒情詩（カーヴァ）に範をとっており、サンスクリット抒情詩からの翻案の体裁をとるものも多い。しかし、次のような例：

夜は過ぎゆく　待っているうちに　もう蓮の花が咲いた
チャメリ花の蕾がふくらみ　香りがただよった

これはサンスクリット詩学におけるヒロインの八種の分類のなかの“自分の部屋で恋人を待ちながら時を過ごす女”(vāsakasajjā)を描写したものである。恋人を待ちあぐねているうちに、陽光が差してロータスの蕾がほころぶ、というサンスクリット抒情詩の決まりごとを踏まえつつも、シンプルな表現の中にネワール独特のメランコリックな静謐さがあり、秀逸である。

演劇写本は、歌曲という宝石を対話を紐として数珠つなぎにする舞踊劇の形式になっている。作品によっては、歌詞を集めただけの歌集のような体裁になってしまっていて話の筋がなんだかよく分からないものもあるが、それは、観客が既に良く知っている人気の物語を題材にしたか、あるいは、対話の部分は役者がそらんじたり、アドリブで演じたりしたのであろう。歌詞には、それぞれ、それが演奏されるべきラーガ（旋律）とターラ（拍子）の名前が記載されている。また、ターラを打ち鳴らす太鼓の音を、擬音語[13]で表記した一種の楽譜が記載されていることもあり、場面と場面の合間や人物の登場の際に、それを音で示すさまざまなパーカッションが演奏されたことを示している。今でも街中を歩くと、上述のダファーを演奏する地区のグループが、アパートの一室を使って練習会をしている音が聞こえてくることがある。同じパターンのサイクルが延々と繰り返されつつ、次第に変化していくのを聴いていると、ミニマル・ミュージックを聴いているときのような不思議なよろこびを覚える。これらの練習場で演奏されるものと、演劇写本の中に記載されるターラやそのヴァリエーションは、基本的には同じものである。マッラ朝の王たち、たとえばバクタプルのジャガトプラカーシャ・マッラ王は、インドからの技芸の輸入・振興に努め、音楽理論書を著したりしている。カトマンドゥ盆地で演

[13] 三味線を習う時に口で言う口三味線のようなもの。ヒンドゥスターニー古典音楽では、ボール（“ことば”）と呼んでいる。

奏される伝統音楽を気をつけて聴いてみると、実は、インド古典音楽の理論を遵守して理路整然と演奏が行われているのがわかる。民俗芸能だからといって、それが土臭く素朴なものだとは必ずしも言えないのだ。

中期ベンガル語の最初の作品

さて、カトマンドゥ盆地に、サンスクリット語のみならず、その後の新期インド・アーリア語の発展の道筋を示すさまざまな言語段階の資料が保存されていることはすでに述べた。インドとカトマンドゥ盆地の間の人の往来は活発であり、また、カトマンドゥ盆地の為政者たちがインドの芸術文化を振興することにことのほか熱心だったという背景がある。残念ながら、現代のインド古典学においては、サンスクリットに比べて、アパブランシャ語や新期インド・アーリア語の研究はあまり熱心に行われていないから、カトマンドゥ盆地に残る膨大な量の写本も、そのほとんどが手つかずのまま放置されている。たとえばネパール国立古文書館に所蔵される写本には、写本番号と、記載される文献のタイトルが付けられているが、それが実際の内容に一致しないものもかなり多いらしい。またラーフル・サーンクリテャーヤンの発見した『チャルヤーパダ』の写本も、ここにあるといわれていたが、どうやらいつの間にか紛失してしまったらしい。悲しいかな、私たちの手に残っているのは、失われた写本を撮影した写真によるファクシミリ版だけである。

と、このような有様であるから、まだ研究されていない写本の中には、新期インド・アーリア語の研究者たちをあっと驚かせるような文献が、ごろごろ眠っているかもしれない。以下に述べるのは、そのような可能性を仄めかすような一つの出来事である。

タモート先生と会って写本を読み進めて一時間ぐらい経つと、リサーチ・センターの係員が気を利かせて紅茶を淹れて持ってきてくれるので、休憩をとり、ネワール文学についてのよもやま話をする。ある時、茶をすすりながらタモート先生が、

「ネワール語の“歌集”とだけ記載がある写本があるんだけど、どうもネワール語じゃないみたいだ。作者名にはチャンディーダーサとある。ベンガル語なんじゃないかな？」

とおっしゃった。あまりにあっさりと言われたので、私は絶句した。

チャンディーダーサとは、中期ベンガル語最初の作品『シュリー・クリシュナ・キールタナ』(『クリシュナ讃歌』) の著者の名だからだ。

先に言及した『チャルャーパダ』が、新期インド・アーリア語東部諸語の古形、つまりベンガル語をも含むインド東部の諸言語の最古の資料だとすると、14 世紀に著されたと推定される『クリシュナ讃歌』は、ベンガル語のその次の段階を示す最初の資料である。ベンガル語をベンガル語たらしめる特徴が明確な形で初めて顕われ、内容的にも、中期ベンガル語文学の主流をなしたラーダー・クリシュナの恋愛を扱った最初の作品である。後代の中世ベンガルの抒情詩との直接的なつながりがあるという点では、ベンガル語文学史において『チャルャーパダ』を凌ぐ重要性を持つ作品といっても過言ではない。しかしその写本は、北ベンガルでたった一つしか見つかっていない。またチャンディーダーサにまつわる禁断の恋の伝説は今日のベンガル地方でも人気がある。彼はアウトカーストの女性との恋に落ち、あるいは、女性のまどかなる乳房の美を寺院の丸屋根に喩え、厳格な僧侶たちに批判されたという。伝説が事実をどの程度反映するかはともかくとして、『クリシュナ讃歌』には人間的なエロスが大らかに謳歌される。

そのチャンディーダーサの名前を冠した作品が、こともあろうにカトマンドゥ盆地で見つかった、となると、ちょっとしたセンセーションを巻き起こすことになるかもしれない。

ただし、チャンディーダーサの著作とされるものは『クリシュナ讃歌』の他にもある。ベンガル地方のヴィシュヌ派が歌うラーダー・クリシュナの愛の讃歌の中に、チャンディーダーサ作とされる歌が多数存在する。現在の定説ではチャンディーダーサという同名の複数の詩人がおり、『クリシュナ讃歌』の作者とヴィシュヌ派の讃歌群の作者は別人だということになっている。言語的に見てもヴィシュヌ派の讃歌群の言語は明らかに新しい言語段階を示している。タモート先生の写本に記されるチャンディーダーサは、果たしてどのチャンディーダーサなのか？

さっそく当該の写本を注文し、自力で解読しようとしたが、ネワール文字には良く似た文字が多いのと、サンスクリットではないので語形の見当がまるで付かないのとで、私ひとりでは歯が立たない。そこでその次の年つまり 2012 年の 8 月に再び 2 週間の日程でカトマンドゥ盆地を訪れ、タモート先生と共同で解読作業を行った。タモート先生も文字は解読できるものの、書いてあることの意味はよく分からない、

と言う。明らかに新期インド・アーリア語であるという表現が散見されるものの、その表現の意味がなかなかつながらないのだ。どうやら新期インド・アーリア語のテキストを、ネワール人がネワール語訛りで不正確に発音し、それをそのまま文字にしてしまったため、これほどのテキストの乱れと読みにくさが生じたらしい。ただ、たしかに、歌の詞の末節にチャンディーダーサという作者名が読み込まれている。また歌詞中に『クリシュナ讃歌』に繰り返し現れる紋切表現に良く似たものが、いくつか混じっていることに気付いた。最も顕著なのは「私の若さは死の蛇」と言う表現で、性に多大な関心を抱くクリシュナに言い寄られたラーダーが、警告して「私の青春の絶頂の美しさは、あなたを虜にします、それはあなたに死をもたらすかもしれませんよ」と言う、繰り返し現れる台詞である。

コルカタのベンガル文学協会で出版された『クリシュナ讃歌』の校訂本の巻末には、テキストで用いられる全語彙の索引が付いており、それで「死の蛇」などの表現の出てくる箇所を調べた結果、果たして、ネワール文字写本に収められている歌詞のパラレルが見つかった。歌詞の数はわずか 13 個に過ぎず、大発見とはいえないかもしれないが、それなりに意義ある発見だと言えよう。

『クリシュナ讃歌』にパラレルが見出され同定できた歌詞に関しては、さらなる疑問が生じてきた。ある程度まではパラレルだけれども、部分的に表現が異なっているのだ。これは何を意味するのだろうか？ チャンディーダーサの作になるとは言え、当初は歌い手たちに口伝されたため異読が生じた、ということなのだろうか？ あるいはラーダー・クリシュナの愛の物語を歌った歌詞がそれ以前からベンガル地方に流布しており、それをチャンディーダーサが自らの著作『クリシュナ物語』にそっくりそのまま取り込み、また他方、同じ歌詞がカトマンドゥ盆地に伝わってネワール文字の写本に記録された、ということであるかもしれない。いずれにせよ、『クリシュナ讃歌』のベンガル文学史における位置を再検討し、また、ネワールとベンガルの関わりについても、もう少し付きつめていく必要がある。

それにしても、『チャルヤーパダ』『クリシュナ讃歌』というベンガル語史、文学史の最古の文献が、二つともカトマンドゥ盆地で見つかってしまった、ということは、全く意外な出来事である。もしかすると、ベンガル地方では消滅してしまった古い文献が、カトマンドゥ盆

地でさらに発見される可能性も、多いにあるのではないか？[14]

[14] この『クリシュナ讃歌』写本についての学術的な情報には次の拙稿を参照されたい。Kashinath Tamot & Makoto Kitada, “A newly discovered fragment of the Śrīkr̥ṣṇakīrtan.” Tokyo University Linguistic Papers (TULIP) Vol.33 (2013), Festschrift for Professor Kumamoto, Hiroshi, pp.293-300.